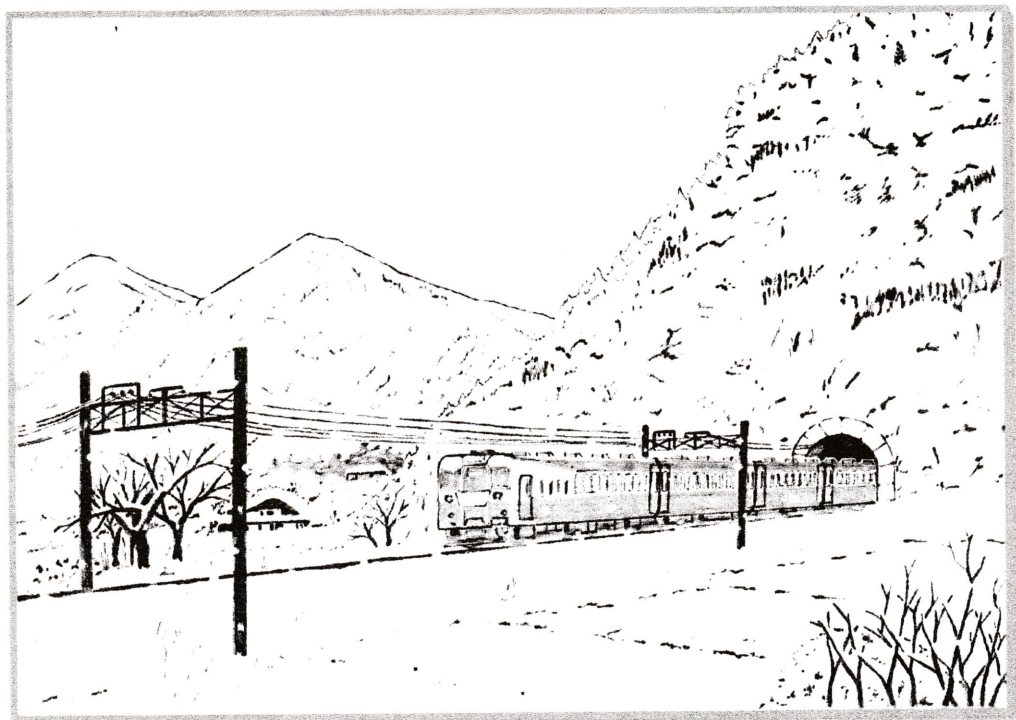




(絵 S・N)

ساواساوا سوگسوگ



سواء سواء

7号 さわさわ

重信房子さんを支える会(関西)

「三輪さん、お待たせしました。」

森本忠紀

「たあのりちゃん、シゲノブさんのあの本ある？」2月始めの、とある日曜日の午後、お隣の三輪さんが飛び込んできました。三輪さんは今年、78歳になる一人暮らしのおばあさんですが、もう子供のころからのつきあいなので、64歳の私のことをいまだに、幼名で呼びます。私には、それだけでわかります。

「うんあるよ、どうしたん？」と聞くと、「今テレビ観てたら、シゲノブさんの娘さん出たはってなあ、何とかいう名前のおっさんにえらいイジメられたはんねん、悔しいてなあ、ちょっと勉強しようと思うて。」

その一週間前、印刷屋さんから『さわさわ』の完成稿が刷り上ってきたので、私は家で一枚ずつ二つ折りにする製本作業にいそしんでおりました。

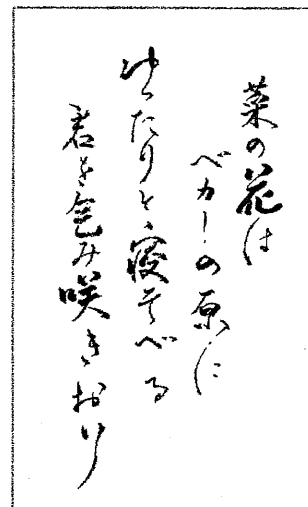
印刷から上がった完成稿を二つ折りにし、重ねて本にする製本作業はいつも、大阪からかおり女さんと住吉さん、二人の女性が応援に来てくださいます。応援に来てくださるとなると、俄然ファイトが湧いて、その前日、私は二つ折りにする作業を張り切ってやっておりました。この工程をやり終えておけば、明日二人が来てくれたとき、残るは重ね合わせるだけの製本作業ということになり、そうして二人に楽をしてもらおうと私は目論んでおりました。そこへ三輪さんがやって来て「何をしてるの？」と聞くので、こうこうやと答え、「そういうことは、私得意やねん」と、手伝ってくださいました。二人でやると作業も捗り、予定よりずっと早く、すっかりやり終えることができました。大助かりで、礼を言うと、三輪さんは「こんな仕事ならいつでもやってあげるわ。何でもっと早く言うてくれへんかったん？」と言われます。更に「明日も来てええか？」と、翌日の作業にも加わってくださることになりました。

三輪さん一人の加勢で、翌日の作業は時間が余裕たっぷりとなりました。それだけではありません。場が賑やかで楽しくなりました。三輪さんは「お二人は重信さんのファンですか？」と聞かれます。重信さんを中心で支えて、お二人のような見るからに善良なる市民がいることを目の当たりにして、三輪さんはいたく感動された様子で、「私なんかもう、悪い人やとばっかり思うてましたやろ」と、熱心な眼差しを向けられます。こんな雰囲気の中、作業は快調に進

み、後の、乾杯・慰労会は大いに盛り上がりました。

手伝ってもらったお礼にできあがったばかりの『さわさわ』を一冊進呈したのを忘れて帰った三輪さんは、一週間後メイさんのテレビを観て思い出、私方に取りに来たというわけです。そして、「この次もまた手伝うてあげるから」と何度も念を押されます。

それ以来、うちへ来れば、「たあのりちゃん、シゲノブさんの本まだか？」と催促されます。印刷原稿があがって、またみんなで製本作業をするのが待ち遠しくて仕方ないようです。こんな、私の隣近所にも、「さわさわ＝一緒に」があるとは、嬉しい驚きでありました。こうして三輪さんという新しい「さわさわ」仲間がまた一人生まれました。そして、7号もようやく編集をやり終えた今、私はこう言うことができます。「三輪さんお待たせしました。」



句 重信房子

書 Y・T (広島刑)

私の京都・大阪物語 (7)

重信房子

<封閉下での活動>

パレスチナへのボランティア派遣が決まり、赤軍派国際部はその準備を急いでいました。奥平さんはパレスチナの派遣部隊の赤軍派メンバーの一員として行くことになりました。そのため、1970年秋から奥平さんは上京しました。城ヶ島での赤軍派結成当時のメンバーの医者がキャップで行く以上、赤軍派のメンバーとして行くか否かはあまり気にしていないことだったのですが、奥平さんも赤軍派として行くということになりました。赤軍派からの要請もありましたが、奥平さんもけじめをつけて行きたいと、参加する以上は責任を負うべきと考えていました。京都での学習会を経て、上京して三ヶ月の新兵訓練

ということになりました。アラブ行き自身は極秘です。公安にバレたら何らかの妨害で出発を阻止されるでしょう。私は非公然に東京で奥平さんが過ごせるか気になりました。当時、機密保持はとても難しいことでした。当時の攻防は厳しく、権力のやりたい時には、様々な理由をつけては、別件逮捕やガサ入れが行われていました。そして狙いを定めた新顔には、夜など数人の公安が襲いかかってボコボコにするとか、強制連行の手口で、近くで起こった強盗の犯人に似てるなどと言っては、交番に連れ込んで、身分照合したり、暴力的であったのです。私たちは「過激派」と呼ばれていましたが、ただ一方が「過激」なはずがありません。攻防によって、激化せざるを得なかったのです。私たちよりも過激派は国家権力で、今から思うと、私たちの方は彼らより過激とは言えません。

藤本拉致事件のような隠微な地下攻防もいくつかありました。69年7・6事件前に藤本さんが拉致された不思議な事件がありました。私は当時、一緒にいたのでよく覚えています。ある日、当時拠点にしていた、医科歯科大515教室の内線電話に「藤本を預かったからな。」という脅すような声のTe1が入りました。当時、私がいる時には、受話器を取っていたのです。すぐDさんら、居合わせた人と対策を取って、藤本さんの最後の足取りを調べました。明治のRさんと一緒に渋谷まで出て、毎日新聞の取材を受けるために、ハチ公の銅像前で待ち合わせがあると言って、Rさんと別れたというのです。当時、藤本さんは反帝全学連の委員長だったので時々、マスコミ取材を受けていました。その後、足取りはつかめず、一週間も経たないうちに再び、同じように電話が入って、「藤本を返す。上野駅まで取りに行け」というようなことを言いました。急いでKさんと私で、出かけようとした時、本人からもTe1が入って、はきものを持って上野にタクシーを飛ばしました。上野駅のアメ横の方に出る建物の出口のところで、地面に裸足の足を投げ出し、放心した藤本さんを発見しました。本人も車に乗せられ、麻酔をかがされ意識を失って、何があったかよく覚えていないとのこと。チカチカ電気が点滅していたなどと言っていました。私がアラブに発つ少し前、その時のことをもっと詳しく話してくれましたが、暴力的な事件でした。

また、神奈川の事務所にしていたアパートの天井裏に盗聴器を仕掛けようとしているところを捕まえかけたこともありました。ちょうど戻った若宮さんが見つけて、捕まえようとしたところ、パトカーが来て、「泥棒だ」というのを有無も言わず車に乗せて保護し、詰め寄る若宮さんを「公務執行妨害でやるぞ」と脅して、走り去ったということでした。これは69年のことで、まだ赤軍派の集会に顔を出して間もない労働者の彼が、ちょうど私が事務所に立ち寄った時に、今起こった話として、伝えてくれたものです。

その当時同じ頃、ML派のアジトの天井裏に仕掛けた盗聴器は新聞沙汰になっていました。公安の側は暴力団のように悪質でした。高卒、地方からの若い警察官は60年代に、大学構内にスパイの先兵として派遣され、脱法行為を強要されていたようです。ある時、上司の指揮で大学にスパイに入り、一緒に入った同僚が一人、大学で学生に見破られ捕まり、吊るし上げをくらったとのこと。自分は逃げたが、同僚は後に消耗して自殺したと、話していた刑事がいました。

私は活動では公然の活動と非公然を繋ぐ位置にいました。赤軍派で女は大して重要な役割を負っていないと公安は知っていたのですが、「いつでもおまえをパクろうと思えばパクれる」などと言っては、嫌がらせで捕まえていました。

こうした厳しい攻防下、奥平さんが赤軍派訓練で東京に行くことになったわけです。アラブへの派遣の話しがもれてしまったり、奥平さんの身分がバレてしまわないかと不安でした。同志社のSさんが当時、軍の責任を負っていたのですが、事情をきちんと踏まえて、本名もバレないようにするというので、上京し部隊活動に加わりました。Sさんは義理人情に厚い人で、本人も「高倉」などという組織名を名乗る人でした。後にベイルートに行ってから奥平さんとその時の、入隊、新兵訓練の話をしたことがありました。ユニットとしてのチームワークを鍛えるとのこと、労働と共同生活で、土方とアパートでの共同生活に学習会。それに訓練はSさんの指示に添って尾行する訓練、尾行をまく訓練などをしていたようです。指示のSさんが道を間違えたりしたことがあったと笑っていました。京都の九条で土方の親方補佐をやっていた奥平さんが優秀だったのは間違いありません。

一月のある時、会議のための室がなかったため、奥平さんたちの共同生活のアパートを借りて、国際部の会議をやることになりました。会議を終えて出ようとして、ドアをあけると、ずっと離れた先に、私を取り調べたことのある刑事が横顔を見せながら、何か話しているのが目に飛び込んできました。包囲されている！あわてて戸を閉めて、みんなで対策を練りました。少なくとも奥平さんの身分はバレないようにした方がいい。彼にはもう戻ってこなくていいように、手短に荷造りしてもらい、塀を乗り越えて逃げさせて、同時に残りの私たちも一斉にドアから出て、こっち側に尾行を引きつけて、何とかそこを突破しました。やっぱり危ない。彼の身分がバレないように京都に戻って、出発準備を行うことにしました。まだ入隊期間の三ヶ月未満ではあったと思いますが、この一件で入隊新兵訓練は合格で、赤軍派の仲間として派遣部隊となったわけです。

<私も出発の一員に、一月の会議>

一月の赤軍派の会議を経て、私も出発部隊の一員となりました。行く予定だった医者への準備が遅れていて、当面は行けないと申し出たことに一因がありました。阪大のOさんも外科の卵でしたが、執行猶予中で、彼も行きたいけどすぐには行けません。もう出発の人数もパレスチナ側に伝えていたこともあって、人数不足を補う意味で、私も行くことにしました。これはまた、当時、Dさんを失って、何人もの人々が活動をやめてしまい、私自身も森さんの指導のもとでは、これまでも意見は合わなかったし、別のフィールドで活動した方がお互いのためにいいと考えたためでした。

Dさんが、「森を信用できん。指導にも自信がない。」と去った時、赤軍派はトップリーダーを失うことによって、組織としては崩壊しました。これを「個人の能力の問題」や「覚悟の問題」としてではなく、これまでの赤軍派の方針・方法が正しかったのか？と問う機会でしたがそうなりませんでした。「前段階蜂起」「攻撃的武装闘争」を前提として結集した赤軍派はそれを否定しては存在意義を失うと思ったのです。武装闘争は勝てないと実感しつつも、過ちだという実感はありませんでした。あの時、武装闘争のみに闘いを狭めていたことを過ちとする転換を誰かが言い出したとしても、当時の私の思想水準では受けとめ

難かったです。弾圧の強化される中で、何としても権力に反撃もしたい。しかし、物質的にも、組織的にも先細りは目に見えている。こうした中でDさんが去ったことで、本当はもう、組織的な機能は失われていました。それを自覚のか無意識か感じた私は、赤軍派の次の道を切り開くために「国際根拠地」・パレスチナの闘いの側からとらえ返してみなければならないと思い、パレスチナ行きを決断しました。

今から考えるとDさんもまた、私も現実の攻防の中で、森さんを信頼できないまま、彼がなし崩し的にリーダーシップをもって進むことをなすにまかせたようなところがありました。Dさんの去った後、もうやめたと去って行ったOさんを説得して、軍への参加を求めたり、心の通う人とは建て直しを図ろうとはしていましたが、武装闘争は疑いのない前提のままです。正規軍でなくゲリラ部隊形成を主張するUさんや、Dさんを慕ったグループや私など、森さんのリーダーシップを信頼しない人々も多く、森さんもDさんの去った後は、本人も望まなかったでしょうが、リーダーとして問われ、その割に厳しい挑戦を受けていました。

最後に森さんと会ったのは一月の会議でした。森さんはそこで始めて実は「革左」と討議していたことを、少し誇らし気に語りました。ちょうど12月に「革左」の人が銃奪取闘争に失敗して射殺される、衝撃的な事件があったばかりです。そして、「革左」から要請があったので、銃を貸したいと彼は提案しました。私はその貸し出しに反対しました。こちらにそんな条件があるとは思えなかったためです。森さんは私の反対に対して、反論せずに提案を引っ込めました。その直後の話題で、Uさんが、森さんが尾行されて自分のアジトに来たために、そこがバレたという批判を始めました。森さんは突然立ち上がって怒りました。「俺がやめるか、お前がやめるかどちらかだ！」と、Uさんをどなりつけました。みなびっくりし、TさんやAさんが、まあまあと止めました。あの温厚な森さんの怒りの姿を私は初めて見ました。当時の私はこれまでも、再三意見の違いもあったために、彼には批判的で赤軍派は崩壊するだろうと、実感すらしてしまいました。森さんはDさんの後、71年12月から、72年の連合赤軍の時まで、およそ一年余を指導したことになります。M作戦と「連赤」の時代

です。軍事に価値を置き、革命を軍事行動によってすべてを評価するようなあり方につき進みました。今からあの時代を見ると、私達の未熟さ弱さを覆い隠すものとして、武装闘争が一層純化されて行ったのだと思います。

<最後の準備>

71年1月から2月、アラブへの出発までの間の多くの時間を、大阪と京都で過ごしました。アラブにボランティアを派遣することも、私自身が出かけてしまうことも、関係者以外誰にも言えませんでした。日本脱出の具体的な条件を作るために、Nさんや、Oさん、Mさんらとこれまでもこうした活動について話をしてきた人々と奥平さんと、打ち合わせを秘かに進めました。ごく限られた人にしか、奥平さんは顔合わせをしていません。通天閣のすぐそばのNさんの事務所に寝泊りしながら、方法をあれこれ検討していました。Nさんの友人の名義を借りて、私が結婚して姓字を変えてパスポートを取得すれば、計画の発覚は遅れるだろう。もし、そのままの苗字ではたちまち別件でやられて、出国はできないという話になりました。

当時、森さんと一緒に赤軍派に復帰していたKさんしか正式に結婚届けを出している人が周りにいなかったのので、Kさんに結婚の手続きを聞きました。また、既婚者しか結婚届の証人になれないということがわかり、結婚届にも署名をKさんにしてもらうことにしました。Kさんは私の後に、組織局を引き継ぐことになっているからと、一緒に討論に入ってきました。このKさんは、兵站財政事業を通して、赤軍派に貢献したいと、森さんと同じ頃、戦線復帰してきましたが、変わった才覚の持ち主です。個性の強い人で、私自身はあまり矛盾もなく共同していましたが、よろしくない戦術を使うので、批判する人が多かった人です。

大阪の事業や商売については私はよく知りませんが、Kさんいわく、「阪和自動車」という会社の社長が中国の革命に感激しており、当時貿易窓口だった広州交易会に関係しているとのことでした。Kさんも中国貿易を始めて、この社長の協力が必要だったようです。大変可愛がられていたと本人が言っていました。ある日私にこの社長と会ってほしいというのです。何故？と聞いたら、実は赤軍派は地下に軍が1000人以上はいる、その幹部と会わずと約束したので、

引き受けてくれと平気で言う人です。もちろん私は片棒は担ぐ気はないので断りました。このKさんが森赤軍派が決めた私の引継ぎ対象でした。同志社のNさんなどは、Kがやるなら自分たちはもうやめるなどと言っていました。Kさんも含めてアラブ行きを話し合い、結局秘密を広げず、早く準備するためには、Nさんの友人の名義を借りるよりも、奥平さんと「結婚」したほうがよいと話になりました。日本にいる時は初めからあのような軍事活動を想定していたわけではありません。PFLPのボランティアの無名戦士として戦うならば、この「結婚」は考えなかったでしょう。当時はまず二人が出発し、次へ繋ぐということで、とにかく出発するということを何より優先しました。

そして奥平さんが結婚届けを2月2日に提出し、旅券の交付を受けて2月下旬に日本を出発することになりました。

結婚届けを出してから、一週間ほどして、おかしい動きがいくつもありました。奥平さんがターゲットになり始めたのです。彼が出発準備を兼ねて実家に帰り、荷物整理を二階でしていると、高校時代の友人の名を騙って、「奥平さん、結婚したんですってね。」と訪ねてきました。応対に出た母親と話をしている声が聞こえたそうです。奥平さんが出て行くと、あわてて逃げて行きました。また、奥平さんが京都で夜、突然襲われてボコボコに殴られるという事件も起きました。私が京都に行ったとき、京大のNさんが「結婚したって本当ですか？」と聞きにきました。「いろいろあるので」と、口止めしながら、誰に聞いたのかと訊ねるとギャンブル好きの京大のNさんの名を出していました。権力側が、何をしようとしているのか探っているのがわかりました。親しい友人たち、残る仲間たちにすら、結婚の話は伏せていたのに。もう時間の問題だと急ぎました。あの頃の超多忙な日々、大阪と京都を毎日往復し、また東京へ戻りと、ずっとバタバタしていました。しかも尾行されても、プロジェクトだけは知られてはならないと、私はその実現に集中していました。東京に戻ると、アメリカ行き部隊も着々と進めていて、私が出るのと同じくらいか、少し遅れて出発すると準備を整えているところでした。

<中止命令の中で>

戸籍抄本など、パスポート取得に必要な書類を揃えていきました。秘かに、

自分でまず出国の条件を探ってみようと、2月のある日、新宿の交通公社の扉を押しました。当時は、海外旅行は限られた人々で、個人の観光旅行は珍しく、商用、留学と、金持ちの、高い、バック旅行の時代です。どんなものか確かめようと、まず一歩踏み出したのです。開けたドアの先の受付の後ろに大学の下級生が座っていて、お互いにびっくりしました。彼も就職したばかりでした。これも何かの縁と事情を話して、全て協力してもらうことにしました。後に、リッド闘争後、彼は私に便宜を図ったと交通公社にまでガサ入れをくらいました。そして辞職を余儀なくされました。申し訳ないことをしました。彼はただ、合法的な通常のサービスをして助けてくれただけなのです。

このころ、森さんの命令で、「軍の決定」として、私の出発を中止するようにと、Tさんを通して連絡がきました。Tさんは同志社出身のの革命戦線の当時のリーダーです。私は中央委員会で決めたことを撤回するなら、ちゃんと中央委員会を開くべきだ、無理なら森さん自身が説明にくるべきなのに、一方的で受け入れられないと拒否しました。財政担当がいなくなるなど、いくつかの理由がありました。私はそれらは遠山さんやKさんらに、すでにひきついでいました。Tさんが私の反論を森さんに伝えに行き、やりとりが続きました。「森さんが君を組織日和見主義と批判している」と、中止の説得を続けました。私は全然動じませんでした。

結局、「赤軍派を辞めて行く」と告げて、集めた金をTさんに渡しました。今このままでは赤軍派は滅びるしかない、救う力は世界の革命に学び、日本の自分たちのあり方の活路を見つけることだ、と主張しました。「日本階級闘争のためにも行く。今の赤軍派の指導部の指示は受けない」などと、啖呵を切ったと思います。「使命感」に燃え、傲慢な自分の未熟さに気付いていませんでした。

それは今思うと、未熟さゆえに決断したことだったかも知れません。それでも自分史の中では、それを諒としている自分がいます。チェ・ゲバラはこんな風にも言いました。「もし我々が空想家のようにと言われるならば救いがたい理想主義者だと言われるならば、何千回でも答えよう、その通りだと。」チェ・ゲバラのこの開き直りのような言葉の、愛と夢とエネルギーを味方として、決断した私はその時25歳でした。こうして私は赤軍派をやめました。そして個人

として行くことに決めました。遠山さんと話し合い、彼女は私の決断を支持して励ましてくれました。

それからまた、個人として出発するために、友人にカンパしてもらったり、再び、京都、大阪に事情説明に行きました。当時、Nさんや奥平さんに、赤軍派を辞めて行くことになったと話すと、奥平さんは、赤軍派でなかった自分が赤軍派で、赤軍派だった私が個人になって行くことに笑っていました。

奥平さんは、この一件から、赤軍派はあてにならないと思い、パルチザンの自分の仲間たちに、赤軍派が、次の人材を送ってこない場合のために、アラブに行つて以降継続的な仲間の派遣の展望と準備を意思一致していました。とにかく決めた通りに出発しよう、後でいろいろ考えればいから。私は言いました。今は権力との攻防を乗り越えて跳ぼう。そんな意思一致をして、出発の準備を続けました。すべて準備が整い、出発の前日、Tさんが森さんの伝言を伝えてきました。「そこまで言うなら、赤軍派として行ってくれ」と。私は森さんとこれまで、人格的に対立してしか対話してこれなかったことを自己批判し、アラブに行ったら赤軍派として頑張るからと、手紙を走り書きして、Tさんに託しました。Tさんとも出発の別れの挨拶をしました。

こんな風にして2月28日、日本を飛び立ちました。「ふう、あなたが先に死ぬんだね。」思いつめたように私に泣き顔を見せた遠山さんは、もう今はいません。私の出発した2月28日の一年後は、72年、あさま山荘の落城と重なりました。そして私がアラブの地を踏みしめた3月1日は、2年後、73年、後にメイが生まれた時間と重なっています。

京都、大阪を発つて新幹線で最後に東京に向かったのは、もういつだったか覚えていません。当時のバタバタした中で2月、もう出発間際で、語り合った、Mさん、Nさんとは今も何十年もの断絶を経て、「さわさわ」で再会し、昔の教訓を語り合っているところです。また、当時、苦労を共にして支えてくれたNさん、Oさんは既に彼岸の人となっていました。当時の権力との攻防に立ち向かった私達の強い団結の数々のエピソードを今も思い出しています。

二つ三つ更に多くのベトナムを！

ゲバラに続けと我ら発ちたり

春^{はる}寒^ふき雨^{あめ}寒^ふき道^{みち}護^ご送^{そう}車^{くるま}で東^{ひがし}に進^{すす}む友^{とも}を残^{のこ}して 重信^{しげのぶ}房子^{ふみこ}

—突然^{とつぜん}の東^{ひがし}拘^こ移^い監^{かん}道^{だう}中^{ちゆう}詠^ぎ—

—（森本^{もりもと}への手紙^{てがは}より）—

今、2月23日夜、6時過ぎです。さっき、夕食後、東拘への移監を命じられました。せめて田川さんの手術前に、田川、森本、原さん3人と会いたかった…と、涙。何だか申し訳ないことになり茫然としています。また、移監先の東京に着くまで、発信が許可されません。そのため、この便りもすぐ届けることができません。とにかく今の今、移監のための荷物整理中ですが、まずお便りを…と書いています。

私の手術の経過が良かったことありますが、大阪医療刑の環境を大いに喜んでいることが仇になったのか…と、勘ぐりたくなるくらいの早業での移監指示です。残念！桜の花が咲く頃に移動を願っていたのですが。そんな訳で、田川さんの手術に向けた大変な時、こちらまで来ていただいた上で「会わせられない」の一点張りの門前払いになるのでは…と、明日の御三方の、面会に來られて戸惑われておられること、目に浮かびます。

5時起床6時出発で、抗がん剤の服用が車中となり、（抗がん剤は前後飲む一時間は食べたりしては効果がないとかで、いつもは8時間おき3回服用、6時AM、14時、22時なのですが、朝食をとったので6時半に抗がん剤を飲みました。）抗がん剤を飲んでまた1時間過ぎないと酔い止めも飲めずとのことで、抗がん剤を飲んでからゲーゲー吐き通しでした。せっかくの薬もすべて吐いてしまいました。そのまま刈谷サービスエリアに吐き通しで着きました。10時半には静岡の牧の原、11時45分は御殿場で、サービスエリアのコンビニの幕の内弁当とお茶が昼食でしたが、全然食べられませんでした。お茶だけがおいしかったです。そうして13時44分、東拘に着きました。ところが初入所者と同じ扱いとかで。ベッドにたどり着くまでに、またまた二時間近くかかり、ふらふらでした。

2月23日 雪柳^{ゆきりゅう}しだれた緑^{きよ}に小さな白^{しろ}咲^さき初^{はつ}め^めの夕^{ゆふ}移^い監^{かん}のしらせ

23日 水仙^{すいせん}にパンジー^{パンジー}クロッカス^{クロッカス}コスモス^{コスモス}咲^さく医療^{いりやう}刑^{けい}務^む所^{しよ}わかれ

の日^ひ来^きる

- 23日 夕食後^{ゆしきご}領^{りやう}置^ち調^{てう}べ^べを六^{ろく}時に終^はえ一心^{いっしん}不^ふ乱^{らん}に友^{とも}に文^{ぶん}書^く
- 23日 面会^{めんかい}を心^{こころ}待^{まち}ちする友^{とも}ありて明日^{あした}の空^{くう}振^はり気^きになつており
- 24日 暗闇^{あんあん}の冷^{ひや}気^きを裂^ひいて護^ご送^{そう}車^{くるま}は東^{ひがし}に向^{むか}へて堺^{さかい}を立^たちぬ
- 24日 うしろ髪^{かみ}引^ひかれる思^{おも}い約^{やく}束^{そく}の面^{めん}会^{かい}の友^{とも}にさよならも言^いえず
- 24日 車中^{くるまちゆう}にて抗^{かう}がん剤^{ざい}を飲^のんだあと吐^はき続^{つづ}けつ刈^{かり}谷^やに着^つきぬ
- 24日 明^あけはじめの曇^{くも}天^{てん}雨^う天^{てん}を突^つき進^{すす}む白^{しろ}梅^{ばい}満^{まん}開^{かい}道^{だう}々にあり
- 24日 十三^{じゅうさん}時^じ四^し十^{じゅう}四^し分^{ぶん}東^{ひがし}拘^こへ護^ご送^{そう}車^{くるま}到^{たう}着^{ちやく}哀^{あい}しい一日^{いちにち}
- 24日 初^{はつ}めから入^い所^{しよ}手^て続^{つづ}きやりなおい再^{また}び東^{ひがし}拘^この住^す人^{にん}となる
- 24日 約^{やく}束^{そく}の面^{めん}会^{かい}の友^{とも}三^{さん}人^{にん}は会^あえず驚^{おどろ}き抗^{かう}議^ぎしてゐるか
- 25日 点呼^{てんこ}後^ごに電^{でん}報^{ぱう}申^{しん}請^{けい}面^{めん}会^{かい}の友^{とも}に謝^{しや}罪^{ざい}と挨^あ拶^{さつ}送^{そう}る
- 25日 癌^{がん}手^て術^{じゆつ}ひかえた友^{とも}の面^{めん}会^{かい}に会^あえず手^て術^{じゆつ}の成^{せい}功^{こう}祈^{いの}る

休^{やすみ}田^{でん}の畦^しに天^{てん}向^{むか}く満^{まん}開^{かい}の白^{しろ}梅^{ばい}ありて哀^{あい}しさつ^{しやう}のる

大阪^{おさか}医^い療^{りやう}刑^{けい}面^{めん}会^{かい}空^{くう}振^はり記^き

原^{はら}啓^{けい}介^{けい}

<小^こさな権^{けん}力^{りき}の恣^し意^いがこ^この国^{くに}を支^さえてい^いる>

実は、昨日早朝から待ち合わせて堺の大阪医療刑務所に出かけた。雨中の高速は渋滞で2時間近くかけてようやく目的地についた。マリ안의手術後、初めての面会解禁日ということだったからだ。それに、田川^{たがわ}ちい^{ちい}は来週から自らのガン手術を控えているということで、ライラ^{らいら}森本^{もりもと}さんと満を持しての行動だった訳である。それにマリアン自身からも「楽しみにしています」というハガキが届いていた。

面会の申し込み窓口で、3人の名前を書いていたら女性の係のひとが「どちらさまに面会ですか？」と聞くので「重信^{しげのぶ}さんです」と応えると、突然に顔色が変わった。事務所内がざわざわとしてきたのが見てとれた。「ちょっと待合室でお待ちください」と言われて、3人で待っていると、まず刑務官が2人やって

きて、「あの・・・今日は面会できないのです」と言う。「なんやと? それってなんでや、理由を言うてみい!!」とたたみかけると、「実は・・・その理由も言えないんです」と自信なさそうに言う。「それはおかしいやろ、それは法律が規則なのか? どこに書いてあるんや、書いたものがあるんやったら、今すぐここで見せてみい!!」と大声を出す。3人がそれぞれ強く抗議して、相手は困り切っている様子。「いや〜、とにかく今日は会えないのです」と、なおも言うので、「ほな、明日はどうやねん? だいたいウチらみんな遠くから来ているんやで。俺なんか昨日から新幹線で来ているんや、面会は昨日のうちに伝えてあるやろ(怒)」と、だんだんこちらのテンションが上がってくる。

そりやそうさ、朝早く京都から高速の渋滞を乗り切って善意のガン患者を乗せて来たんだから、簡単に引き下がる訳がない。「明日もダメです。その後もわかりません」と首席刑務官は応える。「それやったら差し入れはどうやねん?」と聞くと、「差し入れもダメです」とにべもない。とにかく、刑務官は理由もなしで必死に我々を追い返そうとする。

「面会は被疑者も我々も持つ固有の権利やで。それを阻害しようというのは君らにも相応の理由がないとアカンし、それにあんたら公務員やろ。公正に業務を行うのだったら我々納税者に説明責任があるやろ。おまけにウチらは武装して来た訳でもないし、見てのとおり素手や。実力で奪還しに来たんやないで。ただ面会を楽しみにして来たのやから、会えない理由をすぐさま言うべきだ」と食い下がっていたら、またひとり刑務官が心配そうに覗きに來た。別に暴力的に排除される気配もないので、さらに毒づく(苦笑)

「あのな、こんなコトしといてタダではすまへんで。これって完全な人権侵害やろ。明日になったらネット上で全世界に事実を晒すで。おまけに裁判もするで」と半ば脅かすと、相手は困惑しながらも「どうか、理由を言えないのは判ってください」と軟化してきた。ついでに彼らの名前も聞き出して全員メモした。ここで、ふと考えを変えて、東京のSさんに電話して大谷弁護士の携帯番号を聞いた。そのあと大谷さんには今起こっている一部始終を伝えた。大谷さんは「あら? だって昨日私は面会したのよ。元気だったもの」と言う。それで、一計を案じて「すみません、このまま刑務官と話してくれませんか?」とお

願いして、首席に「昨日はふつうに面会できたと弁護士は言ってるやないの。我々に理由が言えないのなら弁護士に伝えてくれ」と私の携帯を渡した。

「はあ、それでは午後三時になったらお電話いただけませんか」と刑務官は大谷さんに伝えて、我々にも三時になったら弁護士さんから皆さんに何らかのご説明があるでしょうと言った。ここで、また上席の処遇部長が現れて、私と名刺交換をする。「はあ、これは奇遇です、私も同郷の者です」と、なぜか打って変わった低姿勢になった。

ことのついでに、「ご本人は元気なんですか?」と聞くと、初めて「はい、お元気です」と処遇部長は答えた。さきほどの首席Nは、こんな質問にも「それは個人情報ですからお伝えできません」との一点張りで、病状が悪化でもしたのかという我々の心配に対してまるで取り合おうとしなかった。この間、40分ほどの押し問答のなかで初めて会話が成立した。

医療刑務所という特殊な世界・・・病院なのか刑務所なのかというと、やはりここは刑務所なのだ。ミシェル・フーコーが狂気と呼んだ「監禁と支配」の論理と見張り塔を持つパノプティコンを構造とする人民への圧制の象徴であった。他者の自由を奪い拘禁し家族や友人を隔離し、ひたすら業務に専心する小官吏たちの思想は、あまりにも皮相で無惨である。

午後三時・・・付近で待機していた我々に大谷さんからの電話あり。

「あのね、残念だったけれど・・・もう彼女は今朝から東京拘置所に戻されてしまったの。これから私も東拘に行ってきます」とのこと。

「わかりました。彼女によろしくお伝えください」と言うほかなかった。護送中は、どこにいるのかも明らかにしない権力は、ひょっとすると未だに我々を怖れているのかと思うと、その現実離れした考え方に複雑な気持ちになった。あるいは彼女の持つカリスマ性に恐れを抱いているのか。いずれにしても納得のいかない出来事である。

しょぼ降る雨の中で、遅い昼食を摂った我々は、ことのほか苦いビールを飲んだ。さぞマリアンも悔しかっただろう。次回は東拘まで面会に行くつもりだ。救援は地道に忍耐強く・・・それだけを再確認させられる一日だった。

Nさんのこと

重信房子

(重信さんが手術のため大阪医療刑へ移監になった、1月29日、4人の死刑囚の処刑がありました。そのうちの一人がNさんで、波女さんが、処刑の直前までNさんと文通していたので、波女さんを通して重信さんもNさんの手紙を読み、Nさんの人柄について深く感ずるところあって、波女さんへの手紙の中で、Nさんのことをいろいろ書いてくださっているの、ここに掲載いたします。)

Nさんの手紙コピー送ってくださってありがとうございます。こんなに良心の人を死刑囚とする必要がどこにあるのか?!とってしまいます

Nさんは罪(後の方で「私が四件の強盗殺人事件を犯したことよりも」とあって、そうした罪を犯したのはわかりました。)と正面から向き合い、主体的な自分を探し出した人のように思います。その分、人間に対して良心的な見方をしておられます。(良心的とは良心に根ざしたという意味で使っています。)

こういう心根の人でも罪を犯すものだというのは、前に、77年に、私たちはダッカ闘争というのをやって、獄中から釈放させる闘争をしたことがありますが、この時、出獄して出会った人たちのなかに「一般刑事犯」の人もありましたが、心根は同様でした。本当に優しく自分に厳しいのです。いろんなしがらみがとれて、本質的な姿が見えている人間性です。

「罪」を犯すのは自分ではあっても、時代という「情況」と、そこで出会った「人と人との関係」の中に罪がありますよ。その流れの中で人間性を踏み外してから、立ち止まって自分を問いつけた時に、「情況」に流されたり、「情況」のせいにしない、「人」のせいにしない、自分を見る人は、そこから自分を獲得することができるのだと思います。獲得しないまま漫然と暮らして一生を終える人もいるでしょうし、罪を犯さずにもっと自分を獲得する人もいます。人間ですから、あるときはすばらしく、また、あるときは醜いのですけれど、Nさんは自分をよく見つめていますね。

「人の痛みや苦しみが分からない人間が、人の命を奪うのです」これは本当にそうだと思います。そして、あまりにも日本の社会は、それ、人の痛みや苦しみが分からない人間が増えているように思います。社会や情況が「力が正義」

「金が正義」になってしまってから益々です。

パレスチナやアラブの戦場では、命が敵によって(イスラエルによって)、粗末にされる分、逆に命の大切さが目の前にあります。日本では「自分さえよければかまわない」ことが、それで生きて行けてしまう不幸ですね。

「再審請求をすれば一時は死刑を回避できるかもしれません。でも再審請求をしたために他の死刑囚がその人の代わりに、確定後わずかな年月しか経ないうちに執行されることを考えた時、自分が行っていることは、罪作りのことをしているんじゃないかと思います。」という点は「違う」と思いつつ考えさせられました。「再審は死刑の拒否権ではない」というのもわかります。(「罪」は個人の遺産だけでなく、社会の遺産として変わらねばと思います。)声高に言って執行を早めることも本当にあるかも知れません。また、死刑廃止運動への疑問や批判もあるかも知れません。それらは良心に照らして賛成できないと思っているかも知れません。(本当にそういう視座を「加害者」が持っていることを社会は知らないのですけれど)それでも、大前提として、「殺す」ことは誰が誰に對してでも許さない、許してはならないということが、人権の根本だと思えます。「国家が個人を殺すのをやめ」て罪は罪として償う方法は他にあるというのが、死刑廃止の海外の運動であり、また、世界の趨勢です。(罪を「許す」のではないのです。)日本もその趨勢に従い、政府・マスコミこそ、そのように社会の風潮を育てる責任があると思います。

「被害者の痛み、苦しみを解決する道は死刑ではない」と。今の被害者への「同情」は、不寛容な社会を反映して、加害者への攻撃になってしまっていると思います。この情況の中では、再審を含む、「殺す」ことを認めない、いろいろなやり方は私はすべて賛成です。そんなことをNさんの文を読みつつ思いました。ま



た、「さわさわ」への助言や、編集長森本さんへの評価も的確ですね。そして、あの「麦の会」『和解』にプロ並の絵を描いていましたね。今もそれをボランティアとしているのはいいですね。「文通で、自分が教えられ、自分を発見する」とまえに波女さんが書いておられて、なるほどなあ…と、このNさんの文を見て思いました。

どんな逆境でも人と人との関係は高め育て合うことができますね。波女さんは、きっと学びつつ、このNさんにまた、大きな生きがいを与えていることでしょう。何だか戦場の人間関係みたいに濃いですね。そうした良心から、また、波女さんのまわりの世界をとらえつつ前向きな力として育ててくださいね。

(絵 S・N)

みんなで書評 松下竜一『怒りていう、逃亡には非ず』 森本忠紀

次の愉快的なエピソードの紹介から始めたいと思います。

シリアの日本大使館が主催した“日本デー”というイベントがあつて、 Damas からヨルダンへ向かう砂漠の中の遺跡で北島三郎が歌を歌うということがあつた。日本商社の社員や家族がバスを連ねて聞きに行ったが、パレスチナ難民キャンプからもバスを出して行った。すると、そのあと、日本赤軍の方にパレスチナゲリラから、北島三郎はパレスチナ解放闘争の支持者かという問い合わせがあいついであつたという。北島三郎が『与作』を歌うのを聞いて、泉水の闘いの歌を歌ったとワースと受けた。なぜなら、パレスチナゲリラはなにかというところから歌を歌う。それも自作自演で、即興の歌も多い。そんなとき泉水は『与作』を歌って人気を博していたそうで、みんな泉水自作の革命の歌、闘いの歌と思ひ込んでいた。それで、泉水の革命の歌を歌う、北島三郎という人はパレスチナ解放闘争の支持者ということになった…。

このエピソードから、パレスチナ社会で泉水博という人は、日本での北島三郎のような存在であるということがわかります。それは、ライラ・ハリドさんが、重信さんの無罪を証言するため日本の法廷に立った時言った言葉、「彼女(重

信さんのこと)たちがしたこと、私たちに対して支援の手を差し伸べてくれたことは、正に日本を代表して、国を代表しての支援の試みだったのです。彼女たちの存在、そして、してくださったことは、正に日本の明るい側面、パレスチナ、そしてアラブ世界に対する日本の明るい顔を示すものです。」と語られていることの鮮やかな具体例の一つともなっているものです。

ところが、その重信さんも泉水さんも日本では現に獄中に捕らわれている。この事実をぼくたちはどう受け止めればよいのでしょうか。ライラさんは「私は、日本国として、そうした支援をしてくださった人々を訴追し、裁判にかけろのではなく、報い、報奨を与えることが、より信頼できる決定であり、理論的な、理屈に適ったことだと思います。」とはっきり述べています。この事実は、日本の暗い側面、パレスチナ、そしてアラブ世界、全世界に対して日本の暗い顔を示すもの以外の何物でもないではないか。

この事実がぼくたちに問いかけていることは何でしょうか。パレスチナの人々から感謝されるような行いをしたのは日本赤軍の人たちだが、獄中に捕らわれているのは決して彼らの責任ではないということ。パレスチナという占領と離散に苦しむ人々のために、世界の支援と連帯を訴え続けたこと、そのような行動を悪いことだとして裁くのは日本の司法であり、それは日本政府の意向です。では、ぼくたちはどこにいますのでしょうか。ライラさんはパレスチナからわざわざやって来て、「裁くのではない、報奨を与えよ」と言いました。

ぼくたちは何か言ったか。何かしたか。今この国で黙っていることは、決してニュートラルを意味しない。黙っているということは、裁きを黙認することであり、判決を支持し、協力しているのと同じことです。そうじゃない！判決は間違っている！泉水さんも、重信さんも獄中にいること自体、世の中間違つとる！とぼくたちはこれまでどこで言ったか？どれだけ言ったか？黙ってることとほとんど変わらない。

だが、お兄さんは違います。1988年9月5日、拘留開示裁判での、お兄さん、泉水和夫さんの意見陳述があります。

「私は拘置所で面会の時、弟の、自分が行かなければ人質が救われない、というので、条件は貰わずに行くという弟の決心に、わたしも生きられる限り生き

ていてくれといって、別れたのです。それによって人質は救われましたが、何人の人がその事を知っているのでしょうか。また、当局は弟のために何をしようとしたのでしょうか。」

「今弟に言ってやる言葉は、精神的に負けず、コマンドとして生きる他に道はないのですから、頑張ってください。今の私の気持ちとしては、赤軍とは何かといわれてもわかりませんが、十一年間、弟の命を守ってくれた赤軍リーダーには、心からお礼を申し上げます。」

ぼくは、わが国の人たちは本当に自分の生活を大切にしているのだろうか、疑問を覚えることが時々あります。わが国で、自分の生活を大切にするということは、他人の生活はどうでもよい、知らないということと、もしかしてイコールなのではないか、そう思うことがあります。平和は大事、平和を守ると、誰もが言います。けれども、それなら、パレスチナが爆撃されたらいち早く、どここの国よりも多くの人の否の声が挙がってよいのではないか。今年1月、イスラエルのガザ侵攻抗議の集会・デモに行き、500人集まった時、よく集まったと思ってしまいました。それが、残念ながら、今の日本をよく表しています。他所のことは知らん！と。

大阪旭区でホルモン焼きの屋台をやっていた時、啞然とする経験をしました。「この頃暴走族が増えている。特に旭区によく集まってくる傾向があるので、屋台へ来ても絶対入れないように」と、学校、警察と一体となった青少年指導員の親父さんがやってきて、大騒ぎなさってます。聞いてみると、暴走族によって平和な生活が乱されては困る、旭区にさえ来なければよい、どこか他所へ行って欲しかったらよい、それが、青少年指導、児童の善導であると堂々と言われるのでびっくりしました。まさに日本の平和とは、日本に爆弾が飛んで来ないこと、どこか他所へ飛んでくれたらよいという理屈であります。それは本当に日本の平和を守ることになるのかという疑問があります。日本の平和を守るといことは、世界の平和を守ることやろとぼくは言いたい。今は亡きわが親友、渡慶次恒徳さんは沖縄を愛し、生涯沖縄を大事にして生きた人でしたが、沖縄を大切にする分、沖縄以外のどこをも沖縄と同じように大切にされました。

お兄さんが言うておられるように、泉水さんが出国に応じたのは、人質の命

を救おうという目的のためであって、だから、最初は日本赤軍と同調して活動するつもりはありませんでした。ところが、アラブへ行って、現地の日本赤軍と接触してから、心開き、心照らしあう関係が築かれていくことになります。そのきっかけとなったのは、泉水さんの痔疾の治療でした。泉水さんは千葉刑務所に在監中に既に痔疾を抱えていたそうですから、長年痔疾で苦しんでおられた。ところが、刑務所にいる間は、本格的な治療はやってもらえなかった。手術の日取りまで決まっていたのに、理由もわからないまま取り消しとなって、結局刑務所では痔疾は放り離しにされていた。悪化する一方のまま、アラブへ着いた時には病臥状態だったという。そんな泉水さんを日本赤軍は入院させ、手術を受けさせた。

そのこと自体、「日本赤軍にとってきわめて危険な事態を招く惧れがあるにももかかわらず、それは実行に移され、泉水は長年の苦痛から解放あれることになった。「こりゃ、俺の負けだえ」と心中に脱帽した時から、日本赤軍を見る泉水の眼が変っていった。」とある。この、「こりゃ、俺の負けだえ」というところ、いいですね。この評伝の一番のポイントであり、山ですね。ここで語られているのは、泉水さんが「革命」に出会ったということじゃないですか。泉水さんが解放されたのは痔疾の苦痛に留まらない。精神が解放された。どうしようもなく縛り付けられていた過去の自己から一挙に脱却できた、泉水さんは精神の自由を獲得したということになります。「こりゃ、俺の負けだえ」という科白はそのことを語っています。この本を通してぼくたちは「革命」に立ち会っているわけです。ライラ・ハリドさんの表現を借りて言えば、それは、「革命」の明るい側面、「革命」の明るい顔を示すものです。

学生のころ、ぼくたちはみな「革命」が好きだった。それはとりもなおさず「革命」の持つ、この解放の力が好きだったということに他なりません。人間を解放する、あらゆる人間を、全人類を解放する、「革命」の力をぼくたちは信じた。「革命」の、この普遍平等性が好きでした。「革命」とは何か。現世にあって現世を超えるものに他なりません。ところが、誰よりも、自由を愛し、自由を激しく求める精神が、限りなく自由を失わなければならなかったというのは皮肉なことでもあります。平たく言えば、「革命」を求める学生たちはどんど

ん頑なな人間になっていったということです。それというのも、「革命」は人間に最高の犠牲を要求するからです。「革命」という事業の困難性。個人の全力量をはるかに凌駕いたします。一生を費やしても到底賄いきれるものではありません。そこから“自己犠牲”というものが要求されます。無私の精神。「革命」を求める学生ほど、生き方のすべてをこの自己犠牲に捧げました。

ただ、日本の学生は泉水さんのような自己解放を経験していない。そのような機会に恵まれていない。それは、ほとんどの学生が先輩活動家による“オルグ”というものによって、学生運動に入っていったというところに特徴的に表れています。“オルグ”というのは、みな、そこから人生が変わる端緒となりました。が、それは泉水さんの場合にある“飛躍”というような要素に乏しいものでありました。それでも、人間の持つ最も高い美質の一つである、“自己犠牲”に、みんな雪崩を打ったように突っ込んで行ったのが、あの、60～70年代闘争の時代でありました。

“自己犠牲”に没入するあまり、自由を失っていることに気が付かなかったというのが、日本の学生運動末期の悲しい運命でありました。その行きつくところにあるのが、連合赤軍事件です。自己犠牲と自由喪失とが一緒くたになって区別がつかなくなった姿がそこにはあります。山岳アジトでみんなが歌を歌おうとしたら、そんな歌は革命的でないと最高指導者に断罪され、歌一つ歌えなくなった、ここまで自由をなくしていた、それでも革命を信じて必死に耐えようとしていた、この若者たちの姿はあまりに悲しすぎるではありませんか。

雑誌『情況』2009年3月号から、「日本赤軍とは何だったのか」というタイトルの連載が始まっています。ぼくは、このタイトルが疑問です。「何だったのか」と、どうして過去形で取り上げられ、語られるのか。60～70年代闘争に対する、激しい弾圧、大きな犠牲の後、今、獄中にいるのは、大道寺将司、坂口弘、永田洋子の三氏と、星野文昭さんの他には、この論文の著者も含めて、元日本赤軍関係のメンバーばかりではありませんか。丸岡修、泉水博、浴田由紀子、西川純、和光晴生、重信房子、それに、アメリカに城崎勉。そこへ、手配中の人たちとして、奥平純三、佐々木規夫、坂東国男、大道寺あや子、松田久、仁平映の各氏がいます。また、岡本公三さんは国際手配されたままです。

これだけでも、日本赤軍というのは、この日本では、決して終ってしまった過去の問題ではなく、重くて深い現在の問題であり、当然にも、「日本赤軍とは何であるのか」という現在形で問われなければならない問題だとぼくは思います。

単にそれだけではありません。日本赤軍を問うことは、「あなたにとって革命とは何ですか」と問うことに他ならないからです。この松下竜一さんの、『怒りという、逃亡には非ず』を読めば、泉水さんが日本赤軍と出会い、革命に目覚め、パレスチナの民族解放闘争に打ち込んでいったということがよくわかります。上のように日本赤軍とはパレスチナの民族解放闘争を担う一翼でありました。すなわち、「革命」を起こした集団であります。そして今は獄にぶちこまれています。それほどに国家存亡の基盤を揺るがしたものでありました。その意味では権力は“正しい”対応をしています。およそ、革命を受け入れる権力はあり得ないからです。法律もヘチマありません。何が何でもふん縛って、見せしめにせずにおくものかという権力者の本音を露にしたものこそ、日本赤軍大捕り物であります。

では、「見せしめ」を見せつけられているぼくたちはどうすればよいのでしょうか。それは、「あなたは革命に対してどういう態度を取りますか」と問われているのと同じことです。実に根本的な問いです。関わり合いになるのを避けるというのが、大方の人の選択で、それは、何かあるごとに、ポロリと露出するのでよくわかります。とぼちちりを浴びたらつまらないということで、そういう選択はあり得ることとしてよくわかります。

ぼくは自分の行動形態を見ると、あんまり自由自在に動き回れないタイプで、土地にへばりついて生きるしかなかった日本の百姓の血を引く自分を実感いたします。百姓一揆とは百姓という存在様式に規定されたものでありつつ、そのような存在様式自体を否定するものだった。だから、その矛盾は一揆の後の処分において一挙に押し寄せたことでありましょう。団結を引き裂くこと、分断すること、バラバラにすること、そのような攻撃が、陰に陽にぼくたちの精神に対して仕掛けられているわけで、それに対抗する知恵もまた、江戸時代以来の農民文化として、また、DNAのなかにも蓄えられているはずで、ぼくは、そこを拠り所に生きようと思っています。

革命に対する態度としては、“分断に対して闘う”ことを自分の態度として保ちたいと、ぼくは希望しています。これは、関わり合いになりたくないという人たちにもできることではないかと考えます。関わり合いになりたくないというだけで、自分の世界を閉じることはないじゃないか、狭くすることはないじゃないかというのがぼくの言い分です。早い話が、日本赤軍と関わり合いになりたくないというのはいいけれども、そのことで暗くなったらつまらないと思います。三度引用します。ライラ・ハリドさんは、日本赤軍のことを、「日本の明るい側面、パレスチナ、そして、アラブ世界に対する日本の明るい顔を示す」と評されています。この、評に対して、じゃあ、ぼくたちはどのような自分を差し出すのでしょうか。

このように、「日本赤軍」はすぐれて現代的な課題であります。日本赤軍という存在自体が、ぼくたちが現在と未来にどのように向かうかという問いを不断に問うています。しかるに和光さんのこの論文はタイトルが示すごとく、目が過去に向いています。後ろ向き目からは、憎しみや恨みの感情しか出てきません。恨み言を並べ立てるような文章を読むことは哀しみしかもたらしません。このまま連載が続くのかと思えば、読者としては無力感に駆られるばかりです。目を現在と未来に向ければ、自ずと愛に溢れた文章が出てきますね。それこそが、和光さんの持ち味だとぼくは信じております。

この書評文を書くには大きな躊躇がありました。それはこの本で取り上げられている泉水博さんという方が、現に実在する人物であるということ、それに、ぼくはこれまで会ったこともなく、読まれてどう思われるだろうと考えるだけで身が縮みます。このようなぶしつけなことをして、寛大なお心でお許しただくよう念じるばかりですが、もう一方では、この本は、今の時代の日本に大きな示唆を与える教訓に満ち満ちているという確信があります。一人でも多く読んで、感想を寄越していただきたいと思います。

短歌で遊ぼう(6)

さわ女と「寄っといで短歌」

題詠～「友」～

<さわ女>

おかげ様でみなさんの励ましの中で癌の手術は2月3日に終わりました。元気に回復中です。大腸癌二つの摘出のため開腹したら、稀な小腸がんをも発見して、摘出されました。また、命拾いました。新しく生まれ変わった気分で張り切っています。

歌も楽しみつつ、みんなと共に進みます。「さわさわ」のスポークスマンであり、柱である田川さんが、3月に胃癌と食道癌の手術。友達、仲間の応援の甲斐あって見事に成功。ただいま入院先で着々と回復に勤めておられます。一日も早く復帰して、再び共に進める日を心待ちしています。田川さんの歌もまた、共に！

(1月27日～2月24日まで手術のため大阪医療刑務所に移監されていました。24日、「さわさわ」の田川、森本、早川さんと会う予定の日、狙い撃ちのごとく、雨の中、東拘に戻されました。とっても残念です。でも大阪での楽しいひと時は胸にあります。)

影法師 (岐阜刑)

2月1日の午後、たかじんのそこまで言って委員会のテレビ番組に出演されていたメイさんのお話の中で重信さんが癌になり、その治療のため大阪の方へ移監されたことを知り、驚きと不安に襲われましたが、後日森本さんから2月3日に手術が無事成功したという知らせを受けて、ようやく安堵いたしました。とにかく一日も早く元気になってください。それとさわさわの会報での、「癌告知捨てては捨てて来た命天命のままに定命を生きん」という一首には感動させられました。この歌のように何があろうとも寿命が尽きるまで、しぶとく生きようではありませんか。

さて重信さんが当時お世話になった警察署を下谷と勘違いしてしまいすみませんでした。そこで道路マップで調べてみたら菊屋橋署のあったところは現在、警視庁の庁舎

になっており、警察署としては使用されていないようです。たしか当時私たちが東京地検に呼び出しを受けた時に乗って行くバスは第3ゲートでしたので、菊屋橋署は上野署からすぐだったと思います。しかも警察署自体小さく、バスの乗り降りは都営バス停の横からやっていたのを覚えていますので訂正させていただきます。ところで今回はお友達の思い出話をどうもありがとうございました。ふうちゃん、ふうちゃんと慕ってくれた彼とはその後、音信不通になってしまったようですが、どこかで生きていて又会えるといいですね。

- (1) ありがたしなるなるさんの励ましは心に積もる雪も融け行き
- (2) 便り来て心が和むひと時は寒さを忘れて絵筆も走る
- (3) 空爆でガザは火の海大晦日血肉は枯れて平和は遠し
- (4) 失言とばらまき政治の麻生さん支率低下で四苦八苦
- (5) 歳時記は四季の移ろい知るための心の窓になればうれしや
- (6) ふうさんの病調伏祈願して写経のためにただ墨をする
- (7) ふうさんの手術終わりし便り受けふつふつとまた夢もふくらむ
- (8) 悟りとは無念夢想に我を置き明日を恐れず今日を生き抜く
- (9) 友として認めてもらえた嬉しさは逆立ちすれば零れるが如し
- (10) 足踏まれムッとする日もあるけれど友と思えば痛みも忘れ
- (11) 刑場の露と消えたる友は今夜空に輝く星になりけり

(9) ~ (11) 一題詠一

俳句

- (1) 羽根をつきすぎななずなの初笑い
- (2) 暖冬で二の足踏んで冬將軍
- (3) 初雪は天使のくれた手紙かな
- (4) 雪降れど春に魁梅一輪
- (5) 初春の光集めて水たまり
- (6) もう少し背伸びしろよとツクシ撫で
- (7) 春泥を蹴散らし楽しソフトかな
- (8) 初雀よく陽の当たる窓辺かな
- (9) アスファルトたんぽぽ笑う割れ目かな

(10) 初雪を里に降ろして眠る山

<さわ女>

影法師さん、癌手術を案じてのお見舞いの心遣い、ありがとうございます。心配かけましたが、痛みもなく終え、今は抗がん剤で主に小腸の方の、補助治療を行っています。“「重信さん」呼びかけられて昼寝より目覚めるごとく手術は終わりぬ”というのが2月3日の手術のあと零れた歌です。しぶとく「さわさわ」のみんなと共に！と願っています。写経までも歌に詠んでくださって感謝しています。影法師さんは人々との交流の中で友を得て、前向きな歌がほとんどですね。当初はちょっとニヒリズムもあったのですが、(もちろんニヒルな歌もそれはそれでなかなか良かったですよ。)今は、暖かい心情に溢れています。近くは、なるなるさんやすぎななずなさんから、刑場の友まで愛情が湧いて詠んでいるのがよくわかります。(2)の歌は独房にいる私も同じ心情になります。(9)も(10)も感情が溢れて前向きで好きです。(11)も心がこもっていい響きです。友を詠むのには私も影法師さんも良い場所にいるのかも知れませんか。

俳句はいつもうまいなあ…と感心します。(3)、(4)、(5)、(6)、(9)は特にいいです。その中でも(5)と(9)は季節をたくみに切り取っていて、俳句というのはこう作るものかと思わせるほどです。ところで私は俳句はなかなかです。俳句のつもりで作っても、すぐ下の句をつけて、短歌に化けてしまいます。影法師さんの句を学びつつ、ちょっと、また刺激を受けています。菊屋橋に止まる手錠の数珠つなぎの路線バスを思い出しています。また、音信不通の友人はもう彼岸に旅だってると思います。返信を伝えたかったのに。それが心残りです。

M・M (岐阜刑)

私は「さわさわ」の作品を通して、投稿者の各位と一時、「生」の苦しみや悲しみ、そして喜びを共有することができて、ありがたく思いました。時に、救援誌を拝読し、真っ先に重信さんの病名を知りました。去年は耳下腺腫瘍を自力で打ち滅ぼしたそうで、師走に入り大腸に腫瘍二つ発見、いたたまれない思いで按じています。重信さんの“何でも来い”一路邁進し、手術と最高裁判決の成果なることを心よりお祈りしています。

「さわさわ」6号の表紙はとても爽やかで、人の和、和の国であることを感銘させられました。また、連載中である「私の京都・大阪物語」(6)今回はヤクザの親分まで登場されるや、途中からアウトローぶく、さらに引きつけられグリーンとおもしろさが増しました。ちょっとエロチックな描写があるともっといいですね。(笑)

- (1) 泣いている友の顔みて大丈夫と上手に言えぬ無力な吾よ
- (2) おねえちゃんだいじょうぶだよさむくともなんとかなるよもちょっとだから

(3) 逢ひたくてばしゃばしゃと雨を蹴りごちんごちんと歩いた師走
俳句

- (1) さわ女の薰りかかえて来てくれる
- (2) もちやけばあちらこちらがふくれけり
- (3) 封筒の匂い鼻つく初便り

<さわ女>

「救援」を読まれているのですね。「救援」のは新年挨拶として書きました。今では元気です。不思議なほど痛みもなく、手術も終えて回復中です

(1)、(2)は、面会に来てくれる友や親族を詠んでおられるのでしょうか。気遣う人柄が歌に表れていて良いですね。友や「おねえちゃん」にこの歌を見せてあげたら、更に心が通うと思います。(3)は、“ばしゃばしゃ”と“ごちんごちん”が生きていて、躊躇や屈折と会いたい！という切実さが、ごちゃつとなっていてリアリティがあります。うまいですね。俳句は(2)が季語もびたりとしてなかなかいいです。

Y・M (千葉刑)

- (1) 友人に発信許せし新法には住所調べる救済もなく
- (2) 「松岡を忘れないよ」と友は言う我身を忘れて仮釈祈る
- (3) 悪友の裏切りの果て二十八年無期の中に己を笑い
- (4) 盤上の駒を交えて生まれたる棋友だけの互いの喜び
- (5) 「友達を作るためには来ておらず」生意気言うほど淋しき者達
- (6) 後を見ず前を見ろよと諭されてジンと来るのは歳のせいか

<さわ女>

どの歌も獄中での人間模様が巧みです。思いがけず獄で同房となり、一緒にいながら、一瞬に交わす友情 ((2) や (4) の歌のように)、歯噛みするほど悔しい悪友の供述、事実でもないのに ((3) の歌のように)！長く獄にあって自分を振り返り、後から来る人を見つめ、人間を見ている目が冴えていますね。特に(5)、「生意気言うほど淋しき者たち」。獄だけでなく社会の無関心の中で、淋しき者たちが増え続けているのだろうと思います。(6)も自分を見つめていますね。きっと歳のせいではないですよ。獄で出会ういろいろな人間を見、己を捉え返しながら、反省と希望に敏感になっているからだと思います。社会に帰ったら、それが鍛えた自己の財産となって、生きることとなりますよ。(1)のことは何か方法がないのでしょうか。

だっちゃん

- (1) 人は言う猿が教える親子の絆 本当はねえ人も猿真似
- (2) ライオンかペンギンマークか塩だけか安さで選ぶ家の磨き粉

<さわ女>

もしかして、旧い旧い友人かなと思いつつ。そうだったら本当に懐かしい。いろいろありましたね。赤軍派で初めて行った、「京都・大阪物語」の頃の友人です。さわやかな笑顔を思い出しています。(1)も(2)も、読んで、この人は短歌を作ってきた人だと思います。こんな感じの短歌を詠む人がいますね。この歌も歌人の歌のようです。(1)も(2)も理屈のようで、屁理屈のようで、当たり前のことのようで、新説のようです！うーん。(2)が少し、世の中を斜に構えて見ている(昔と違う？！)詠み手の姿が透けて見えます。

おおみ女

- (1) 重き荷は信と愛と勇なりきひと房の花咲かせたる子よ
- (2) 東拘のアクリル窓に手を合わせつつ大和の地に立つ撫子を見ゆ

<さわ女>

(1)、みごとな歌をありがとうございます。「世に類型歌や本歌取りのものは多いですが、これは房子さん以外の誰のものにもできない歌のつもりで詠みました。私たちはそれぞれ荷を負っていますが、人により、その中身は違います。人によっては『偽善』であつたり、『欺瞞』であつたりしますが、房子さんはこ

の世で一番美しいものを荷にされていると思います。」とあります。うーん、すごい、と唸りながら、歌を他人に贈られた歌のように鑑賞しています。感謝。

(2)「忠紀さんにしっとりとした大和撫子のような方と報告させていただきました」とあり、それはびっくり。違います…と。母が生きていたら、大いに異議を提起することでしょう。母は過分に私たち子供がほめられると、倍くらいにこきおろしていました。歌がうまいと言われると、「いいえ、音痴です。」と断固として主張しますよ。私たち子供は母の言うとおりの「音痴」だと思ってたら、普通だったのでホッとしたのを思いだしつつ楽しく読みました。引越し先は山と川と緑がありますか。再会を楽しみにしています。

東浦

(1) 歌詠みの無念の心ひしひしと判決までに会わんとぞ思う

米国で不当に拘留中の友を思い詠む

(2) ネパールでFBIに囚われて早や13年の月日経ちにし

(3) SEKIGUNとレッテル貼れば無実でも六十年の求刑アメリカの
病い

(4) 目撃の証言した女(ひと) 法廷で本人見ても心当たり無しとぞ

(5) 髪薄く背も低いとの犯人像それでも有罪となるアメリカという国

(6) 覚えなき無実の罪で囚われし友の思いは日増しに沁みぬ

(7) よく見えるようになったと電話あり遠き異国で囚われし人

(8) テラホの冬は府中よりも暖かしと便り伝える人の強さよ

<さわ女>

(1)は私が2月24日突然の移監の時に歌った歌をみて、感じてくれた友の思いとして受けとめています。「会わんとぞ思う」は百人一首にもありましたね。重い決意を感じます。東浦さんは短歌は初ですが、なかなか心情の強い人なので、歌が零れるように作れる人と見受けました。(2)から(8)はアメリカで無実の不当な判決を受け、拘留されている友への連帯と救援の熱い思いが伝わります。友を思う友情から、どんどん心情を歌にして昇華させる能力には感心しています。今後も詠むことを心がけてみてください。原さんもそうでしたが、ぐんと良い歌を作れると思います。(2)は緑内障の手術で失明の恐れを脱した

という喜びの思い。アメリカ当局への怒りの(3)は字余りでも迫力があって、歌が生きていて良いと思います。「六十年の求刑アメリカの病い」を「求刑六十年病めるアメリカ」とした方が納まりが良い気がします。(4)、(5)、(6)は冤罪の現実を直視した歌です。(7)は遠くにいる友への思い、(8)は友の強靱さを巧みに事実を切り口として詠み、感動している詠み手の立場が伝わります。東浦さんの同志愛、旧友に対する熱い救援の想いは私にとっても歌の感想以前に感謝ばかりです。連帯の想いをかみしめています。

波女

(1) なぜこんなに重いのか届かぬ絵待てる間それが命?

(2) 諦めと希望の揺らぐ炎みつめし日々をのみ君は生きし三十と二年

(3) 時は来て哀れで醜い死囚の逝くと人々安堵す冷たき一月

(4) やさしき作品多く子らの心に向け届く卒園を前に

(5) 一人無縁墓地にて反省し続けると語る君の誠意と決別の優しさ

(6) C o o l さは幼少時に閉じ込められた冷蔵庫扉を閉めれば叫び聞
こえず

(7) 夢に来て死にたくないと叫びし君抱きて被害者の名を唱え逝かせり

(8) 立派に死囚をいきるゆえ最期の看取りの約束こそ君の手紙の総て

<さわ女>

(1)から(8)まで波女さんが文通し励ましていた「死刑囚」の友人が、一月に刑を執行され、氷のような、炎のような、抑えられない心を歌っています。励ましているより、励まされていると波女さんは、心から信頼していた分、彼は自らの反省の思いを波女さんに吐露して、逡巡なく旅だったのでしょ。それを厳然とした事実として直視しながら、歌に結晶させた波女さんの心が、燃えているように響きます。絵の上手だったその人から、もう、絵も届きません。

(1)も(2)も(4)も(5)も波女さんは現実を認めようとし、直視しています。翻って、この友の死を(3)のように喜ぶ社会や、執行する国家権力があることに目を向けている、この視座も鋭いです。(6)は自分の心で彼を捉えた姿が浮かびます。(7)、(8)に包むような愛情が零れています。波女さんの衝撃とたじろがない強さを歌に読み取り、弱さはあるときには強さ、

ぐんと突出するそんな姿勢を見ました。波女さんはやっぱり、歌人の器の大きな人です。

哲蕉

- (1) 出会いから四十余年経ちたれば友愛越えて姉兄となる
- (2) 学園に蒔かれし種は半世紀不死身の花を咲かし続けおり
- (3) 運命の君との出会いなかりせば今日のこの日存りや無きや
- (4) 君許せ案じる我の切なさは友愛超えて姉弟愛
- (5) 吾娘なる君とメルアド教え合う学生気分の介護研修

<さわ女>

大学の入学、十代からの友情の思いを詠んでいるのが(1)から(4)の「友」の歌です。一緒にデモに加わり、議論し、その時の生き方が今でも、労働運動、地域活動の自分のバックボーンになっていると、いつも哲蕉さんはいっておられます。「『友』ということ意識して作りました。拙い表現なので良い言葉が瞬時に湧かないのですが、要するに、私は重信さんやK兄らと出会って42年、半世紀近く、この友情は還暦を越えた現在では、もう兄姉のようなものではないか？あるいは、心通わせる部分では実の兄姉以上のものがあるのではないだろうか？と、しみじみ思うのですが、そこん所の表現がうまくできないのです。」とありました。いやー、その心情は強く訴えて表れています。(1)と(2)が特に好きです。感慨が伝わってくるようです。友情は風雪の中で兄弟になり、同志になり、絆になり人々へとまた、広がっていくものですね。こうして哲蕉さんも一緒に詠みあえるなんて！(5)の歌は、「自分の娘のようなと表現したい時、吾娘なるでよいのでしょうか？吾娘のようなでは平凡すぎるし…、と思いながら、吾娘なると言ったら、自分の娘とおもわれないでしょうか。それだと意味が違うのですが。」とありました。「なる」でも「ような」と解釈されると思いますが、この歌の場合には、「吾娘なる歳」、「吾娘の歳の」、「吾娘のごとき」「吾娘に似た」でもよいのではないかと思います。また、「教え合うメルアド君は吾娘の歳学生気分の介護研修」とした方がいきいきとなりますね。まず、書いてみてから、ひっくり返したり、順序を変えるとまた、味が出ますよ。

平良

- (1) 手術後の傷癒えやらぬその体いとう間もなく前進する君
- (2) 定命と悟ったように言いながらその定命を二倍生きる君

<さわ女>

ありがとうございます。探究心旺盛で経営の他にも大学などで講じたり新事業などと多忙な平良さんに励まされて、私も何かせねば！です。平良さんこそ定命を二倍生きるがごとく（森本さんが書いておられたように、平良さんは体にボルトを入れた病気を乗り越えて活躍しておられます。）果敢に新しいことに挑戦しておられます。「不況の中『何をなすべきか』『何ができるのか』可能性が1%でもある限りは粘り強くそれを追求して行きます。」とお便りにありましたが、私もそのたちです。可能性は決してゼロにならず、マイナスからも可能性は100%以上育つこともあります。いつもそんな風に考えて生きてきました。(1)、(2)の歌も過分に生き直すテーマを与えられたように思えて嬉しいです。

N・U

〇弁護士を通じて重信さんのお便り、Yさんからの手術完了のお電話、共に立春の2月4日にいただきました。経過はいかがですか。大阪医療刑の環境はまずまずと山本さんから伺い、安心しています。田出井町は懐かしい地名、相棒と私が共同生活を始めた所です。堺市郊外の荒れ放題の地形でしたが、散歩の足を伸ばすと大阪刑務所のコンクリート塀に突き当たりました。塀の周りは畑になっていて、大勢の収容者が鰻をふるい、遠くに看守が一人だけ立っている光景をよく見かけました。ある時、一人の受刑者が寄ってきて、「俺の知り合いに共産党員がいるよ。手紙があるなら言伝てようか」と囁きました。柵も何もない畑地でした。当時、拘置所は大阪の若松町にありましたが、そこには待合室の一隅に机に大きな薬缶とたくさんの湯呑みが置かれていて、その頃有名な共産党の女闘士が党の関係者をねぎらっていました。一般の人がお茶を所望すると怒って

おりました。そこはまるで治外法権の場所さながらです。新聞は治安維持法で逮捕された大量の党員の記事で賑わっていた頃の話です。封建の尻尾を引きずっている時代でしたから、牢屋という陰惨な印象しかなかった当時、差し入れも面会も自由で、今考えると本当に牧歌的な時代だったように思います。

今日は旧暦正月13日、陽差しは燦燦と輝いていますが、外は寒風、花の便りはまだどこからも届きません。が、春は間近、予後を大切になさってください。

- (1) 岐阜美濃に老囚おわす冬至晴
- (2) 蔦もみじからくれないに獄の塀
- (3) 氷河期の智性理性は絵空事
- (4) 芋飴を舐めて至福の寒日和
- (5) 冬草の根のしたたかにときを俟つ

<さわ女>

97歳の老革命家のぶ女さんは、また、句の先輩でもあります。『さわさわ』の方にもっと早くお便りを生かせばよかったと、今頃気付いて後悔しています。いつも励ましのお便りと共に熟練の味の句を添えてくださいます。治安維持法の時代を闘い、私の公判にも高齢をおしていつも傍聴くださった誇るべき先達です。こうした人々の闘いによって、私たちは闘いの場を得てきたのだと、つくづく感謝を込めて思います。今回の歌は、泉水さんのことを按じて「老囚おわす冬至晴」と歌ってくださっています。どの句も信念で世間を見る句がこれまでもたくさんあります。今回の芋飴の句も懐かしくまた、巧みに学ぶばかりです。(5)は本当に…！好きな一句です。そんな思いで獄でまた、新しい命を生きて行きます。感慨をこめて文通中の便りから掲載させていただきます。」

華灯

- (1) せつなさが溶け込むように山端の陽赤々沈み友と別る
- (2) 狂いなき鋳物作れる我が腕も倉庫番では無用と友嘆く
- (3) 酒飲めぬ我を交えて酒席を持つ友あるはうれしかりけり
- (4) 路地の奥もう待てないと友が去りやかんの水が煮えたぎる朝
- (5) 北に住む偉丈夫な彼逝くの文友より届く日雪静かに降る
- (6) 知りしはず去る友の理由^{かり}しかしもう思い出せない齒^は噛みし歩む
- (7) 夏座敷友の弔問藤簾薄暗き真昼母と別れ去る
- (8) 五月嵐五月祭の旗揺れ千切れスクラムの友息まだ白し
- (9) 人の世は酒ありてこそ言う友へ新酒^{あら}の香届け杉玉ゆらり

<さわ女>

いつも季節の短歌に節句の写真、「デジカメ歌人」としてちょっとした有名人です。いつもありがとうございます。今は節句となると待ち遠しく、写真と歌を心待ちにしています。華灯さんは題詠「友」11首いただき5首程いただいて載せようと思いましたが、絞りこみましたが、どれも載せたいと9首になりました。(1)、(2)、(3)、(4)、(6)、(9)どの歌もじわつとした愛着が伝わってくる歌ばかりです。面と向かってほめないけれど酒を交わしたり、愚痴をきいたり、去りがたく友と居る感謝の気持ちが伝わってくるようです。華灯さんの友達はきっといい思いをしていますね。また、(5)逝った友、(7)母への弔問、別れにこもっている空気が伝わってきて静かないい歌です。(8)はやはり歌いたい歌、華灯さんの今も心に活きているスクラムの志故ですね。友を詠むことは自分の心の拠り所を詠むことだと教えられます。

かおり女

- (1) 面会の日取り決まって「どきどき」とWe shall overcome練習する夜
- (2) 梅散りて桃咲く頃とならんとももう大阪に春は来ない
- (3) 梅の花咲く頃会えるはずだった今は別れの香とぞなりける
- (4) 一年ぶり届いた便りにやわらかきミサンガありて友の日々思う
- (5) 海とみかん光と風の味がする紀州の蜂蜜友より届く
- (6) わが名呼ぶ声をたどればなんとまあとなりのホームで友飛び跳ねている

<さわ女>

会いたかったですね！25日と予定も決まっていたのに。24日、田川さんらを会う日の前に、大阪から東京へと移監となり、せっかくみんなで歌ってくれるはずのWe shall overcomeが聞けませんでした。このロミオとジュリエットというか、「君の名は」ではないか…(旧い!)とにかく残念！このおもいをかおり女さん側から詠んでくださいました。(1)は会う予定の想い、(2)は会えなかった想い、(3)は少し落ち着いて、会いに東京に行くぞ！という想いと共に伝えられています。その間、イラク侵略戦争6周年抗議集会に「さわさわ」の旗を掲げて行ったとか！元気な反戦活動に連帯！(4)

と(5)はきっと親しかった友の、紀州からの便りと、みかんや蜂蜜。大学時代や日常のサイクルで親しかった友が場所的に離れてしまうと気持ちはかわらないのに気付くと疎遠になってしまったり、時間が流れてしまっています。そんな友が送ってくれた便り、改めてお互いに変わらないともであることを確認した嬉しさに溢れていますね。友は本当にありがたい。思わず相手の日々の暮らしに思いがめぐりますね。そんな友がいることは幸せです。

森本忠紀

- (1) 雨しるき夜の扇町公園に怒り悲しみ人々集う
- (2) 手紙書くわが背にもたれ眠りたり電車ごっこをせがみし吾娘は
- (3) デイ終えて帰るを迎え抱く母の化粧の匂いほんのり哀し
- (4) 入院し明日手術という手紙差出人は君自身なり
- (5) また一つ君は名言生みたりき「お腹切るまでは病人じゃない」
- (6) 身も心もぐっと引き締まる心地して風の寒さが嬉しき早春
- (7) 音もなく大地を濡らし降る雨を優しく見しや太古の人も
- (8) 看板のかなを捜して声あげる「うどん・ほんまち」吾娘は四歳
- (9) 大阪にいち早く春告げし鳥疾く引き裂かれ東へ去りぬ
- (10) 「さわさわ」が始まり得たる多くの友生涯通して続けと祈る
- (11) 沖縄の心を吾に教えしは吾が師にして友渡慶次恒徳
- (12) 愛いっぱいホワイトデーを吾が路上短歌発表記念日としよう
- (13) 懐かしくまた新たなり読み直す句集『友へ』の一句一句が
- (14) 行間に誠の満ちて溢れおり受刑の友のくるる手紙は
- (15) ただ一つ「人を信じる」そのことを教えてくれたる吾が友なるか

俳句

- (1) 降る雪や正義求めしあの時代
- (2) 幸せは友得る予感春となり
- (3) 遠き日のおさげの髪と沈丁花
- (4) 満面の笑みを湛えて春立てり
- (5) 誰彼に「おうい」と呼ぶや春の雲

- (6) 春来れば体もプリン大好きよ
- (7) 春の日はパレスチナへと文を書く
- (8) デモの旗軒に干したり春日中
- (9) 菜の花に送られニコニコ卒園す
- (10) 桜咲く手術してもう笑ってる
- (11) 手に掬う春の光を君の手に

<さわ女>

いつもお便りにも安定感のある歌・句のかずかず、受け取る度にこちらにも刺激を受けています。家族の歌はいつも心に沁みるほどいい歌が多いです。(2)は秀逸です。これは歌壇でも選者が選びそうです。(3)もとってもいいですが、もっと音調をアレンジしたら際立ちます。「デイケアを終えて迎えし母を抱く化粧の香りほんのり哀し」とか。私のことも詠んでおられますね。(4)(5)ですが、お腹を切るまでは病人ではないのは、私には当たり前の気分だったのですよ！切られてから、本当、動けなくて病人になりましたが。(10)の想いは私も同じです。気持の通う人と人が出会いながら、絆が暖かくひろがっているのを、本当にありがたい励みとしています。句の方はどれも明るくていいですね。忠紀さんの歌も句も、次に開かれた希望の続きが見えてきそうで、いつもホッとさせられます。

田川晴信

にっこりとうなずき会えるはずだった切り裂かれしは二・二四の堺

<さわ女>

手術はどうですか？ちょうど手術を終えたという便りを受けたところです。ちょっと心配な内容もありますが、命はつながったと、原さんと感謝したという、忠紀さんの便りです。この一首は会えなかった、2月24日を歌ったものです。会って、「さわさわ」のこと、手術のこと、語り合えなかったのが、今も悔しく心残りです。でも3人でその後、「やけ食い」した堺のステーキの味は？！写真を送ってくださった人がいました。良い写真でしたよ！

原啓介

- (1) 伝えてと無言のきざし探せども難波の空に塔のみ黙し

- (2) 願わくば雨よ伝えて僕たちはこの日來ること幾とせも待ち
- (3) マリアンの万笑の顔想像すあれもこれもと前夜を過ごし
- (4) 枯れ葉踏み寒空の唄くぐりつつ霧が晴れ行く確信に燃ゆ
- (5) 時いつか隔てて遠し夢のみちなお遠ざかり悲しみに満つ
- (6) やまひ押し二時間余り車にてあれも語らむこれも語らむ
- (7) 恋に似て愛にもまさる我らあり幼き日にも原点ありき
- (8) 魔術師の指さえあれば旅人のやまひ払いてともに笑む君
- (9) 赤い橋渡せない橋このひとは誰も帰らぬ望み果つ川
- (10) 君を抱くただ君を抱く君不在君居ぬ世界我は拒否せり

<さわ女>

2月24日面会の日、朝6時発で堺から東拘に戻されてしまいました。24日は、「さわさわ」最強軍団登場の日で楽しみにしていたのに！この日の顛末は後に弁護士さんから、原さん、森本さん、田川さんからも知らせてくれました。約束したのに突如会えなかった我らが「さわさわ」最強軍団は、弁護士に電話し、携帯のそのまま、大阪刑の責任あるものと話をさせたようです。弁護士は抗議と怒声で騒然としていた様子を知らせてくれました。「さわさわ」の最強軍団は知も弁も立つ人ばかりですから、大刑はたじたじだったようです。

(1)も(2)も(3)も原さんの心情が溢れていて、本当に同じように無念の思いでした。歌の中に絆を感じ、兄弟の思いを強くしています。(4)～(10)、友の絆の強さを味あわせてくれます。24日の面会空振りの日、癌手術控えた田川さんと、車二時間も語り合ってきたことなど。(これは田川さんからも待ち合わせのベラミを間違えた話と共に楽しいひと時だったと伝えてくれました。)恋に似て愛より深い最強軍団の七首です。「何でやろこんなに話がつきないは…」とお互いにあきれつつ、田川ちいを中心とした絆で「さわさわ」を引っ張ってきてくれました。田川さんの好きな歌は浅川マキですが、ことに「赤い橋」が好きだと、手紙にもありました。きっとそれを知るが故に、原さんは、(9)で、手術に向かう田川さんを思いやって、零れた一首だろうと思いますそれに「世界の中心で愛を叫ぶ！」のこの愛は、恋愛を超えた尊友田川ちいへの原さんの愛の叫びです。手術を終えた田川さんを抱き寄せた原さんの笑顔の

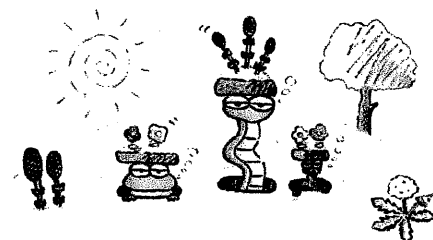
写真の横にこの一首がありました。(病院の中心で愛を叫ぶ?!)この歌はすごい迫力で同志愛を宣言しています。結びは「我は拒否せり」より「我は拒否する」の方が原さんの友情の決然とした結句として良いように思います。愛情、友情は歌をさらにすごいものにしていますね。短歌のよい力です。

さわ女の「友」の歌

- (1) 放水に輝く磐安田講堂友とスクラムインターナショナル
- (2) 連帯せよ！お茶ノ水から市街戦磐の友らに向けて進撃
- (3) 落城のブントの旗を見上げつつ誓いし友ら還暦を越え
- (4) 匂い立つ白フリージャ届けし友癌に驚き遠方よりきたる
- (5) 友がいて家族がいて文絶えず励ましの中で希望の手術
- (6) 面会の予定知らせる友の文語りたきこと次々と湧く
- (7) 「さわさわ」の会いたい友の面会日に引き裂かれるごとく東に発ちぬ
- (8) 失望は希望に向けた跳躍台友の手紙に思う一言
- (9) 「ガザ勝利！」アルジャジーラに語りたるパレスチナの友らの希望に触るる
- (10) 朝顔の大輪の青咲かせたる旧友異郷にて不屈の闘い

次回「短歌で遊ぼう」(7)の題詠は「夢」です。
投稿をお待ちしています。

(6月中に送ってくださいますよう)



【編集後記】表紙の絵を描いて下さったS・Nさんはもう、この世におられません。今年1月29日、4人の死刑執行が発表されました。そのうちの一人がNさんでした。Nさんのことは前号6号で紹介いたしました。『さわさわ』を読んでくださって、感想を書いてくださり、「毎号重信さんの簡単なプロフィールを載せてほしい」という要望も寄せてくださったので、私は、Nさんへの返事という形で、Nさんの年齢、30歳前後の世代の方たちにどうすれば、少しでも理解していただけるだろうかと考えながら、この欄に短い文章を書いて、重信さんのことを紹介しました。そして『さわさわ』6号を送ったときには、時既に遅く「該当者なし」という添え書きとともに返って来ました。結局、6号に書いたNさんへの返事はNさんの目にふれることなく終わってしまいました。それだけではありません。表紙の絵、カット絵、そして重信さんの「Nさんのこと」という文章も、この7号に載せたいと、6号の編集が終った時点で私は決めておりました。それらがすべてNさんの目にしてもらえないとは、考えもしなかったことで、ショックは大きく、結果的に追悼掲載になってしまい、悲しく残念でなりません。ただ、Nさんとの関わりはこれで終わったわけではなく、今後も続いていくことと思います。それがNさんの冥福を祈ることに繋がると信じます。／2月3日重信さんの手術が無事終了しました。続いて3月25日、田川晴信さんの手術が無事終了しました。重信さんはもう忙しくお仕事をされています。田川さんは、食道と胃の摘出という大手術を乗り越え、四日後には、歩く様子や笑ってる顔を原さんが写真に撮って、送ってくれました。重信さん、田川さんへのたくさんの励まし、応援ありがとうございました。

「ルーパーのすきまの桜三分から一挙に満開友の無事知る 房子」編集終了間際に届いた重信さんの手紙の中の一首です。／次号8号は、7月発行予定です。お便り、投稿等、6月中にお送りいただきますよう。(森本)

販売は1冊300円です。なるべく年間購読をお願いします。送料込みで、年会費は2000円です。

販(郵便振替口座 00920-2-169764 さわさわの会)

連絡先〒635-0061大和高田市磯野東町3-27 森本忠紀

Tel/Fax 0745-22-4002 mail: toppinsyan@kpa.biglobe.ne.jp